

# 校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

## いじめられている子の理解

いじめがわかった時には「いじめの本当の事実を知っているのは、被害者だけである。」という立場で、何をおいてもまず被害者の話に耳を傾け、どこまでも彼を守り、二度とつらい思いをしないような環境を整えることがいじめ解決のスタートになります。そして、被害者が安心して学校生活を送るために「何をしてほしいのか」、率直な被害者の思いに応えることも重要です。「加害者もある意味では被害者」などという同情的なとらえ方では、被害者は到底納得しませんし、その解決もおぼつかないものとなります。

### 1. いじめが発覚した後の、更なるいじめのひどさを誰よりもわかっている

いじめの現実がひどくなればなるほどいじめは報告されなくなる傾向をもち、いじめられている子はじっと耐えながら、苦しい生活を強いられることとなります。いじめられている子は、そのことを先生や親に言えばさらにひどくいじめが待っていることは経験上十分に承知させられているのです。ある意味、それができない子とされているのでいじめのターゲットにされているという側面もあります。いじめられる苦痛に加えて「いつバレるか」という不安と怯えまで抱えさせられます。そのために逆に自己の被害の隠蔽に走るのです。いじめの発覚を恐れる気持ちは、むしろ加害者よりも強いのです。とても学校がつらく休むしかない状況にあっても、いじめが発覚するかもしれないという不安から休めません。そして、本人が休むことで教師がいじめを察知すれば、もっといじめがひどくなるという恐怖をもっています。自分のせいで発覚したと思われるようになることがとても怖いのです。まさに生き地獄のような悲惨な現実が学校を舞台にして実際に存在しているのです。加害者の方は、いざとなったら「しらばっくれよう」と決めています。

### 2. いじめられていることを一番言えないのが親である

どの子にとっても、いじめを親に言えないのは当然です。それには、「親の前ではいい子でいたい」、「心配をかけたくない」などいろいろな理由があると思われますが、一番強く働くのは、「親は自分のことに一番一生懸命になってくれる人、自分のことで一番怒る人、いじめがわかればきっと怒って学校に行ってしまう。そうしたら解決どころかもっとひどくいじめられる」と、まずは誰でもそう思うのです。いじめの解決には、親の理解と協力はもちろん欠かせません。しかしながら、教師は本人のこの気持ちをわかった上で、早急かつ慎重に解決に向けてのスタートを切りたいのです。双方の親の一刻も早い協力なくしていじめの解決はあり得ません。いじめ対応の中で、「どうして言ってくれなかったのか」、「どうして気付いてやれなかったのか」という後悔と自分を責める言葉が必ず聞かれます。しかし、上で述べたように、それができないのが「いじめの恐ろしさ」なのです。誰でもいい、周囲の大人が早く気付いてやり、周囲の大人や学校を挙げて彼を守りながら、加害者の指導にあたる必要があるのです。

### 3. ターゲットが変わるまで、苦しく悲しい日々が延々と続いていく

学級における典型的ないじめは、たいていは「無視」から始まります。加害者は、まだいじめているという感覚はもっていないかもしれませんが、それがだんだんとエスカレートし、友だちからは、まるで存在していないかのように振る舞われ、やがて、声をかけられるのは、「死ね」というメッセージだけになっていく。それも「なぜ死なないの?」、「いつ死ぬの?」という恐ろしいとしか言いようのないメッセージを送り続けることもあります。(大河内さんのお話で紹介された北九州市の女の子の手紙にありました)人間は、一人でいる時に感ずる孤独よりも、誰かといる時に感ずる孤独の方がつらいと言われるれます。本人の苦しみは想像を絶するものです。そして、次は何をされるのかと、いつもビクビクしながら生活をしています。無視はされているが、もしかして誰かが話しかけてくれるかもしれないこと

を、一日中待っているのです。しかし、誰にも話しかけてもらえない悲しい日々が続いていくのです。子どもにとっていじめは、嵐のようなものであると言われています。子どもは、嵐が過ぎ、ターゲットが他の子に移っていくのをひたすらじっと待つのです。いつかは終わると思わなければ、とても耐えられない。被害を最小限に、期間をできるだけ短くするために、従順な被害者でいるのです。それが最善策だと信じています。いじめへの恐怖はそれほど強いのです。次のターゲットが決まれば、自分の安全は保証されます。いじめの被害者はクラスに二人はいない、一人だからこそ効果があることを子どもたちは知っています。そんな陰惨ないじめは、大人の誰かが早く気付いてやり完全に止めてやるしか解決方法はない。その一番の責任を負うべきは担任教師です。一刻を争うのです。本人に勇気をもてというのは、酷な話なのです。

#### 4. いじめる側の巧妙な人を操りだます方法でいじめが継続していく

学級でいじめが継続しているにもかかわらず、一時的に被害者に優しくし、しかしすぐにいじめを再開することがあります。あたかもいじめが終わったような錯覚に陥らせ、再びどん底に突き落とします。決して珍しい例ではありません。子どもたちは人がもっとも傷つく方法を知っています。また時として、被害者と加害者のゆがんだ共犯関係の中で作られる独特の心理があります。被害者がある時から、暴力を振るわれることを許容しはじめると、時にそれを手加減してくれることに感謝の気持ちさえいさぐさになります。また喝上げの金額を一時的に少なくすることも同じ効果を狙っています。こんなことを繰り返しながら、いじめが延々と続いていくのです。これは、反社会的グループによるいじめに典型的にみられる汚い手口です。

#### 5. とうとう耐えられなくなると、ようやくいじめを察知してもらえる行動にでる

被害者はいじめにどうしても耐えられなくなった時に、誰の目からもわかるようなメッセージ、例えば保健室から教室に入れない、学校を理由もなく休むなどを発信することで、ようやく教師や親がわかることとなります。彼にとっては、それはとても勇気のいる行動なのです。それでも直接的な言葉では表せず、そういった行動で自分の気持ちを表さざるをえなくなった、子どもの切ない気持ちを、大人は必ずわかってやりたいのです。的外れな指導は決してしてはいけません。周囲の子どもはとっくに知っていたのですが、誰も教師に知らせてくれず、耐えられなくなるとはじめて彼は、イレギュラーな行動にでることになります。その時には事態はかなり深刻で、不登校になってしまうなど、解決が難しい状態になっています。中には、不登校にさえなれなく苦しんでしまう子どももいます。そうなった時には、その子の話に耳を傾けながら、「最後まで必ず守る」というメッセージをまず伝え、必ず全校で足並みをそろえ、その子の望む当面の問題解決に向かいたいと思います。